

第5回川と山のぎふ自然体験活動の集い 報告書

2008年11月2日(日)・3日(月) 於 中津川市 馬籠ふるさと学校

2008年
11月2日・3日
日曜日 文化の日

子どもゆめ基金
2008年度子どもゆめ基金助成事業

第5回

川と山のぎふ 自然体験活動の集い

自然体験活動 技の見本市

場所 馬籠ふるさと学校 (旧神坂小学校)
日時 11月2日(日) 午後2時 開会

エクスカージョン
< 11月2日 9時～12時 >
●中山道ガイドウォーク
講師:馬籠宿ボランティアガイド
●榎平の森ガイドウォーク
講師:自然体験工房NEMO代表 齋藤 友和
●林業のプロから学ぶ
講師:林業家 安江 謙臣

分科会
< 11月2日 日曜日 >
①自然体験ぎふ
ポータルサイトの立ち上げとその後
②ネットワーク・人づくり
自然学校にできること
③バードコールメダル
④プロに負けないポスター作り
⑤馬籠の秋の味覚を味わう・栗きんとん

< 11月3日 文化の日 >
①地球温暖化防止ネイチャーゲーム
②秋の聖山でバードウォッチング!
③自然体験と環境教育
…白川郷でもやっています
④秋満喫、馬籠自然観察会
⑤木のクラフトに挑戦ー拍子木作りー

主催 川と山のぎふ
自然体験活動の集い実行委員会
後援 岐阜県(予定)
中津川市教育委員会(予定)
特定非営利活動法人
自然体験活動推進協議会
場所 馬籠ふるさと学校
岐阜県中津川市馬籠4797-29
馬籠宿・藤村記念館から徒歩約10分
当日連絡先: 090-8335-7869 (鳥居)

基調講演
～街道の歴史と文化～
仁科 吉介
中山道歴史資料館
主任研究員・郷土史研究家

お問い合わせ先
川と山のぎふ自然体験活動の集い事務局
特定非営利活動法人エヌエスネット内
担当 高塚
〒500-8141 岐阜市月丘町5丁目13番地
TEL.058-249-1366 FAX.058-248-4722
email ryo@odss.co.jp

Copyright © 2008 Jemssa All rights reserved.

目 次

実施要項	3-8
実施記録	9-27
アンケート結果	28-30
総括にかえて	31



募 集 要 項

2008 年度子どもゆめ基金助成事業

2008年度 第5回川と山のぎふ自然体験活動の集い 募集要項

ご挨拶

2005年3月に県内の自然体験活動を行なう団体や指導者が県立森林文化アカデミーに集合して始まったこの『川と山のぎふ自然体験活動の集い』も今年で5回目を迎えました。美濃、飛騨、郡上、西濃と場所を変え地域の自然体験活動をふまえた集いを展開してきましたが、今回は東濃地方で開催のはこびになりました。

東濃地方では地域の歴史と文化に根付いた活動がNPOそしてボランティアの団体や個人において特色ある活動がなされてきました。ただ、素晴らしい人材やそのスキル、そして団体の意欲的な取り組みも周知されているとは言えず、お互いの連携も十分できていないが現状のようです。こうした課題を岐阜県(県内のみには限定されませんが)の自然体験活動の問題としてとらえなおし、今後の自然体験活動の展開を探ることにしてみました。

自然体験活動に携わる多くの方々の参加と交流をとおして、子どもたちや地域の人たちの自然体験活動が一層充実したものになりたいと願ってやみません。

<テーマ> “自然体験活動 技の見本市”

主催 川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

後援 岐阜県(予定)、中津川市教育委員会(予定)
特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会

日時 2008年11月2日(日)～11月3日(月)

場所 「馬籠ふるさと学校」(旧神坂小学校) 岐阜県中津川市馬籠 4797-29

参加料 1,000円(部分参加の方も同額です)

ただし、食費と宿泊費は自己負担となります。そのほかに夜の交流会は参加費1,000円をいただきます(希望者のみ)。

昼食 500円 夕食(温泉入浴つき) 1,000円 朝食 500円 宿泊費1,500円(布団レンタル代を含む)

日程 別紙日程表参照ください。

持ち物 上履き・防寒具・マイカップ・タオル・歯ブラシ他洗面用具一式・筆記具・健康保険証(写し可)

その他 前泊が必要な方はお申し出ください。対応可能です。

ポスター等の展示セッション・団体活動紹介の場を設けます。ふるってご出展ください。出展希望の方は参加申込書にその旨ご記入下さい。

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会(アイウエオ順)

川尻 秀樹(森林インストラクター岐阜)
北川 健司(特定非営利活動法人エヌエスネット)
窪田 一仁(どんぐりの森実行委員会)
柴田 甫彦(環境市民ネットワークぎふ)
佃 正壽(森林たくみ塾)
中澤 朋代(松本大学)
三島 真(山と川の学校)
八尾 哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

事務局

〒500-8141 岐阜市月丘町5丁目13番地

特定非営利活動法人エヌエスネット内

担当 高屋 良平

E-mail ryo@odss.co.jp

Tel 058-249-1166 Fax 058-248-4722

事業内容

第1日目(11月2日)

◎ エクスカーション 9:00~12:00

	概要	担当
<p>中山道ガイドウォーク</p> <p>★ 集合時間 11月2日 9時</p> <p>★ 集合場所 馬籠ふるさと学校</p> <p>★ 講師 馬籠宿ボランティアガイド</p>	<p>宿場として有名な中山道馬籠の宿。一度は訪れたい馬籠。何度も訪れているかもしれない馬籠。今回は、馬籠宿を愛するボランティア・ガイドによる案内で、文豪・島崎藤村や幕末の歴史を感じながらゆったり歩きます。新しい発見がまっています。あなたもこれで馬籠通！ 翌日はあなたがガイドしているかも！？</p> <p>* 馬籠ふるさと学校から徒歩で馬籠宿を巡ります。</p>	<p>原 令子 (千葉 篤志)</p>
<p>樺平の森ガイドウォーク</p> <p>★ 集合時間 11月2日 9時</p> <p>★ 集合場所 馬籠ふるさと学校</p> <p>★ 講師 赤尾 友和(自然体験工房 NENO代表)</p>	<p>美濃から信濃へ抜ける東山道随一の難所神坂峠。そのふもとにぼっかりと残された、ツガやケヤキの巨樹がたたずむ「樺平」の森を中心に散策します。近くには天然の冷蔵庫「風穴」もあり、見学する予定です。</p> <p>まあ、のんびりぶらぶらと行きましょう。</p> <p>* 現地へは各自車に乗り合わせて移動します。</p>	<p>栗谷本 征二 (北川 健司)</p>
<p>林業のプロから学ぶ ——木のこと、技のこと、知恵のこと、山のこと——</p> <p>★ 集合時間 11月2日 9時</p> <p>★ 集合場所 ふれあいのやかた かしも (道の駅「加子母」向かい)</p> <p>★ 講師 安江 鍊臣(林業家)</p>	<p>全国にも名の知れた「東濃松」その中心地である旧加子母村で林業を生業(なりわい)とするカリスマ林業家、安江鍊臣氏。その経営理念と山に対する熱い思いは全国の林業家の目指すところでもあります。岐阜県林業グループ連絡協議会の会長でもある安江さんがつくり出した「本物の林業」を見て、感じて下さい。</p> <p>* 「ふれあいのやかた」より車で約10分</p>	<p>山本 喜美江 (川尻 秀樹)</p>

● 受付 13:00～

◎ 開会式 14:00～14:30 多目的室

基調講演 14:30～15:30 『街道の歴史と文化』

仁科 吉介(中山道歴史資料館主任研究員・郷土史研究家)

概要	中津川宿は、京都と江戸を結ぶ中山道(古来東山道)の中間的位置にあり、東西の重要な情報センターとして歴史資料の宝庫であり、知られざる街道の歴史と文化を講演していただく。はたまた、どんな逸話が飛び出すことやら・・・またとない機会です。
----	---

◎ 分科会1 15:30～18:00

1. 自然体験ぎふ・ポータルサイトの立ち上げとその後

概要	ますます需要が高まる体験活動ですが、岐阜県下の情報を網羅したポータルサイトの必要性が高まっています。 この分科会では、ポータルサイトの内容や目指すもの、運営手法などを話し合います。 ネットワークの次には情報発信、協働事業など岐阜県の魅力を更に伝える手法をポータルサイトを中心に考えます。
講師	高田 研(都留文科大学社会学科教授)
担当	北川 健司(エヌエスネット)

2. ネットワーク・人づくり、自然学校にできること

概要	1980年使い捨て社会や環境破壊への危機感から、「中部リサイクル運動市民の会」を始められた萩原喜之さんに参加いただき、「ネットワーク」「人づくり」をキーワードに「自然学校にできること」についてワークショップを開催。今年、サラゴサ博覧会に参加された話題提供もいただきます。 萩原さんは「地域リサイクルシステムづくり」「参加型の環境まちづくり」、「企業とのパートナーシップ」「人づくり・環境教育」、「エコ商品の開発・普及」、「他団体とのネットワーク」、「NPOの支援・インキュベート」など幅広い活動を行ってこられました。
講師	萩原 喜之(中部リサイクル運動市民の会元代表)
担当	千葉 篤志(郡上・田舎の学校事務局)・中澤 朋代(松本大学)

3. バードコールメダル

概要	木工端材、間伐材、竹などで作る楽器演奏体験。 楽器は、ダブルバードコール、トロンボーン各種、鼻笛いろいろ等、演奏体験を通して端材の利用価値を再発見します。 * 費用 一個/600円 * 場所 ふるさと学校教室内 * 所要時間 1時間30分
講師	栗谷本 征二(栗くり工房代表)
担当	赤尾 友和(自然体験工房 NENO)

4. プロに負けないポスター作り

概要	<p>イベントや展示会などアピールしたいときに大型ポスターは絶大な威力を持っています。家庭にあるA4サイズプリンターを使って、1m 以上の大判ポスターを作ってみませんか。ポスター制作に必要なポイントをわかりやすく指導します。</p> <p>①デジカメ写真の撮影と加工 ②キャッチコピーと文字表現 ③PhotoShop の使い方 ④大型ポスターの印刷</p> <p>* 会場には3台のパソコンを用意しますので、ポスター制作に参加することもできます。また WindowsXP のノートパソコンをお持ちの方、会場にご持参いただければご自分のパソコンでポスター制作にチャレンジできます。(PC持込は限定5名)</p>
講師	田村 明(朝日大学ビジネス企画学科教授)
担当	川尻 秀樹(森林インストラクター岐阜)

5. 馬籠の秋の味覚を味わう・栗きんとん

会場:「本三屋」(旧民宿)

概要	<p>馬籠の秋の味覚「栗きんとん」と「芋やこもち」を作って味わいます。</p> <p>講師は馬籠を訪れる旅人の宿として、長年多くの人々を接待してきた民宿のおかみさん親子。メイン会場から馬籠宿の入り口にある旧家「本三屋」さんに移動して行きます。馬籠の昔話を聞きながら、おいしい手作りおやつを頂きましょう。</p>
講師	古井 佳子(郷土料理家)
担当	原 令子(岐阜県ネイチャーゲーム協会)

◎ 展示説明 20:00～21:00

☆ 間伐材・バイオマスチップ使用の新品や新素材開発の展示・説明

20:00～21:00 田村 明(朝日大学)

◎ 交流会 20:00～22:00

◎ 夜の飛び入りプログラム

※ プログラムを実施いただける方は同封の参加申込書に概要を記入しお送りください。隠れた才能、技の持ち主の方ふるってお申し出ください。

第2日目(11月3日)

◎ 早朝飛び入りプログラム

※夜の飛び入りプログラムと同様

◎ 団体紹介 8:00～9:00

岐阜県内外の団体の活動や自然体験にかかわる会議の内容・予定を発表する場です。

※ 今回は団体発表のための時間を持ちません。発表は各団体で展示ブースにおいてお願いします。ただし、申込書で事前に送っていただければ、参加者全員に配布する団体紹介の一覧のチラシに掲載します。

◎ 分科会2 9:00~12:00

1. 地球温暖化防止ネイチャーゲーム

会場: 馬籠ふるさと学校周辺と教室

概要	120以上あるネイチャーゲームアクティビティの中から「地球温暖化防止」をテーマにプログラムを組み立てました。 野外で温暖化防止ネイチャーゲームの実践。その後、参加者の皆さんと共に“シェアリングネイチャーの6原則”に基づき、「地球温暖化防止」をテーマとしたプログラムを考えてみたいと思っています。
講師	岐阜県ネイチャーゲーム協会指導員
担当	八尾 哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

2. 秋の里山でバードウォッチング!

概要	「声はすれども姿は見えぬ」「すぐに飛んで行ってしまふ」などなかなか野鳥観察は難しいと思っているあなた。一緒に晩秋の里山で野鳥を探して歩きましょう。 ツグミやカシラダカなどシベリアから渡ってくる冬鳥に出会えるかもしれません。
講師	大畑 孝二 ((財)日本野鳥の会 チーフレンジャー)
担当	山本 喜美江(東濃自然観察連絡会)

3. 自然体験と環境教育・・・白川郷でもやっています

概要	楽しい自然体験でも、やりっぱなしでは、もったいないですね。 体験からの気づきを学びとして、やがては環境保全につながる効果が望めてこそかと思えます。自然の中で、自然に向き合って、他者と共に体験するプログラムには、多くのことが期待できます。 分科会では、ワークショップ形式で、擬似自然体験をして、「体験が学びにつながる体験」を共にしたいと願っています。
講師	西田 真哉(トヨタ白川郷自然学校校長)
担当	川尻 秀樹(森林インストラクター岐阜)

4. 秋満喫、馬籠自然観察会

概要	馬籠宿周辺の秋の自然を満喫する自然観察ウォークに案内いただき、自然を良く見て伝える自然体験の指導法を伝授いただきます。小野木三郎さんは、「サブちゃん」の愛称を自称する別名「グリーンマン」として親しまれています。自然の仕組みや大切さについての指導法などを教えていただきます。
講師	小野木 三郎(日本自然保護協会前参与)
担当	村瀬典康(長良川環境レンジャー協会)

5. 木のクラフトに挑戦—拍子木作り—

概要	あかりシリーズ第4弾、今回は近年ほとんど聞かれなくなったあの「カチカチ」という音の拍子木をつくります。素材は中津川の櫨平にちなんでケヤキを使います。馬籠宿の一夜、心に沁みる拍子木の音で気分さわやかになりませんか。出来るだけ多くの方のご参加をお待ちしています。 希望定員10名、参加費900円(教材費)
講師	入江 鐵夫(行灯工房代表)

◎ 全体会 13:00~15:00 多目的室

2日間の集いの成果を、分科会のコーディネーターやアクティビティ担当の方々からの報告を中心に参加者全員でわかちあい、今後の方向を確認する場にします。

- ・エクスカーショレポート
- ・分科会報告
- ・まとめ

司会: 中澤 朋代(松本大学専任講師)

実施記録

■エクスカージョン

★ 中山道ガイドウォーク

ガイド: 松川さん、竹内さん(中津川宿ボランティアガイド)

担当者: 原令子(ネイチャーゲーム協会)

報告者: 小林弥生

《 報告 》

普段から中津川宿においてボランティアガイドとして活躍されている松川さん、竹内さんの案内で、馬籠宿を中心に中山道をご案内いただきました。

岐阜県内の中山道、西の端は関ヶ原ですが東の端はここ馬籠宿。馬籠宿は、長さ約600mの宿場町で、江戸の宿場から数えて43番目にあたり、木曾路11宿の一番南。ついこの前までは長野県山口村でしたが、平成17年の大合併で岐阜県中津川市に編入されました。

島崎藤村の小説『夜明け前』に「木曾路はすべて山のなかである」とあるように、馬籠宿は宿場全体が坂道。東海道と違い「川留め(川が災害で通行止めになること)」がないことから、多くの人々が実は中山道を歩いたらしく、また「姫街道」とも呼ばれるほどに姫君の籠がよく通ったそうです。

今でいう官報掲示板の役割を果たしていた「高札場」のこと、水路には豊富な水が流れているが宿の上に森がないため実は慢性的に水不足だという話、敵の侵入を防ぐために作られた宿の入り口付近にある「枡形(ますがた・クランク型に道が曲がっている場所のこと)」のことなど、街道の宿ならではのエピソードも満載。さらに、恵那山が非常に美しく見えるビュースポットも紹介いただきました。

入り口に木曾五木が植えられている史料館や、大きな杉玉のある家「大黒屋」、本陣後に作られた「藤村記念館」、藤村の墓のある「西沢山永昌禅寺」などなど、建物もみどころ満載。島崎藤村にまつわるエピソードを中心に、それぞれの場所にちなんだガイドを聞くことができ、とても楽しく、ためになる時間になりました。

尾根沿いに続く馬籠宿。江戸から木曾の山道を歩いてきた旅人達は、眼下に広がる美濃平野を臨み、ほっと安堵のため息を漏らしただろうなあ… そんなことを思うエクスカージョンでした。



★ 樺平の森ガイドウォーク

ガイド: 赤尾友和さん(自然体験工房 NENO)

参加者: 20名

報告者: 藤井亜希子(森林文化アカデミー)

《 報告 》

中津川の人々の「山への関わり」を知ってほしい… 自然体験工房 NENO 代表の赤尾友和さんの案内で、樺平周辺のガイドウォークが実施されました。

地名の由来は、そこに世界最大級の樺(けやき)が生えていたからとのことですが、現在はその切り株まで売られてしまって、残念ながら見る影もないそ



うです。以前は林業も盛んで森林鉄道が走っていましたが、入植中に山が抜けたため入植をあきらめ、そこに広葉樹の林ができたそうです。東濃地方には珍しい広葉樹の森は、人によっては白神山地や屋久島に来たかのような驚き方をされるそうです。イヌシデ、ホオ、トチ、コナラ、コメツガなどが生い茂り、落ち葉が美しい、とても気持ちのよい空間でした。

その後、昔利用されていて唯一残っている強清水の風穴と、現在も利用されている神坂の風穴を見に行きました。風穴とは、蚕種(蚕の卵)の冷蔵貯庫として石室を築いたもので、この地域の蚕種の生産は日本一の規模といわれていました。戦前、養蚕は農家の副業として重要な収入源でした。大正6年ごろになると蚕卵の貯蔵保存が冷蔵庫で行われるようになり、また、昭和の大恐慌で製糸業が没落すると、次第に風穴を利用することがなくなりました。以前、神坂地区には 29 の風穴があることが確認されていましたが、現在、形をとどめるのは強水に一つしか見ることが出来ないそうです。風穴からも時代の移り変わりを感じます。

最後に、湯船沢川の留橋へ行きました。伊勢神宮の遷宮材を用達した湯船沢。材木は「川狩り」と言われ川で運搬されていました。留橋辺りが一番の地峡部で、留(堰)が築かれ、そこに流路を設け木材が流されていた場所でした。そこに「しゃく」という漢字が石に彫られています。これは鬼が死ぬと「しゃく」になるという伝説にちなんだ一種のおまじないだそうで、山を恐れながらも暮らしのために山に入った当時の人々の思いが伝わってくるエピソードでした。

樺平で、人の暮らした歴史や林業の名残を見ることが出来、自然の中で昔の中津川の山や人々の生活に思いをはせた半日でした。

★ 林業のプロから学ぶ

場 所: 加子母地域

ガイド: 安江鍬臣さん(林業家)

参加者: 12 名

報告者: 田中有紀子(森林文化アカデミー)



《 報 告 》

メイン会場の馬籠からは多少離れたここ加子母。熱心な参加者が 12 人も集まり、代々にわたり、独自で山を守り続けている安江さんのお話をききました。

まずはじめに、参加者同士、お互いの自己紹介をしました。自然体験活動事業を企画運営されている方、インタープリターをしている方、役場で働いている方、市民ボランティアとして活動されている方などが参加されていました。次に、安江さんの山を見学させていただきました。最初に、このエクスカージョンの担当の山本さんが「安江さんの山(人工林)は、入ったときすがすがしくて、人工林のあるべき姿をみた」と紹介された山。それが事実かどうかを自分たちの目と耳で確かめるべく、山へ向かいました。山では、安江美学・哲学として、林業に対する熱い思いを聞くことができました。林業に真剣に取り組み出してから 30 年。それでもまだまだ先輩たちに聞きながら仕事をしているそうです。そこでまた安江さんの林業にかける思いは熱いんだ、と再認識しました。

最後に、参加者から「四方無節の材はなぜ高いのか」という質問がありました。安江さんの答えは、「100 本あっても、そのうち四方無節の材は、1 本くらいしかとれない。それくらい貴重で、そしてなにより見た目がきれいだということ。これ以上説明できないな…。四方無節の材を作るには、小さいころからの枝打ちが大事で、枝打ちにもする人の性格がでるといことも教えていただきました。

プロの林業家の心意気と情熱に触れることのできた、貴重な時間となりました。

★ 開会式

司会：川尻秀樹さん(森林インストラクター岐阜)

場所：多目的室

報告者：小林弥生



《 報告 》

● 実行委員会からの挨拶(北川健司さん)

県内の自然体験活動を行う団体や指導者が県立森林文化アカデミーに集合して始まった「川と山のぎふ自然体験活動の集い」も今年で5回目。美濃、飛騨、郡上、西濃と場所を変え、残る東濃での開催となった。各地域で意欲的に取り組まれている方の交流の場として定着した感じがある。

今回の会場である東濃は、歴史、文化に根付いた活動がなされてきた。歴史文化を知るのも自然活動のひとつ。基調講演やそれぞれの分科会にこうした要素も反映させた。今回も、岐阜県およびその近郊の方々だけで80人余りの人が集まった。岐阜のみなさんの熱心さ、関心の高さが伺える。今回もさらに交流を深め、より一層、子ども達やそれぞれの地域の人たちの自然体験活動を充実したものにしていてもらいたい。

今年から5年かけて、120万人の子どもたちが1週間程度、農山漁村で生活体験をするプロジェクト(子ども農山漁村交流プロジェクト)がスタートした。今回参加されたみなさんも、研修会への参加やコーディネーター登録などしてもらいたい。

● 受け入れ地域・東濃を代表しての挨拶(栗谷本征二さん)

● オリエンテーション(八尾哲史さん)



★ 基調講演

テーマ:街道の歴史と文化

講師:仁科吉介さん

(中山道歴史資料館主任研究員・郷土史研究家)

報告者:小林弥生



《 報告 》

● 「幕末」期から中津川を見る

島崎藤村の歴史小説『夜明け前』にも見られるように、中津川の人たちは幕末の短い期間、じつは主人公であった。

● 江戸時代における街道の役割

江戸時代当初の「街道」は、今の物資輸送や行楽のための「高速道路」とは少し意味が違う。例えば、東海道は薩摩や長州などの勢力に対する守りとして家康が慶長7年につくさせた事実から分かるように、元は軍用道路だった。

後に街道は、参勤交代に使われるようになり、さらに世が落ち着いてきたころ、ようやく「旅行」に使われるようになった。ただ、そのころはまだ女性が旅行をすることはなく、文化・文政・天保のころようやく女性の旅行日記が現れる。

江戸、京都、大阪……街道には「情報、人、物」が行き交っていた。情報をどうとらえるかがカギだった。

島崎藤村は、この宿にある大黒屋の当主の記した『大黒屋日記』をもとに、『夜明け前』を書いた。この日記には、当時の馬籠の様子が克明に記されていた。『夜明け前』では、主人公、青山半蔵(島崎藤村の父がモデル)の死に至までが史実に基づき描かれている。小説ではほかに、浅見景蔵(中津川宿本陣 市岡殷政がモデル)、蜂谷香蔵(中津川宿年寄役 間秀矩がモデル)らが活躍した。

● 中津川宿の活躍の基礎的条件

中津川は、東西に中山道が走り、北には高山に抜ける飛騨街道が通り、南側には恵那山の裏に飯田がある。宿の「陣屋」は物資のターミナルだった。当時の中津川宿の人々は大変裕福で、和歌、お茶、お花、短歌などをたしなみ、文化レベルも非常に高かった。中津川の資料は今でも大変重要で、多くの研究者を集める。

● 日米修好通商条約調印と中津川商人の交易

1853年ペリーが来航し、後に、日米修好通商条約が結ばれる。1859年には横浜港が開港し、誰もが貿易をしてよいとされた。中津川宿の間秀矩(はざまひでのり)は、すぐに横浜へ行き、糸を売って大成功する。為替レートが変わり大損したこともあったが、4年で返済したという。

● 皇女和宮の下向

桜田門外の変の後、幕府の威信回復を行う必要があった。そこで、有栖川家に嫁ぐはずであった和宮(仁孝天皇の第8皇女)が、徳川家に嫁ぐことになった。この際、大奥からお迎えにあがった老女が花園である。このとき泊まったのが中津川の間家で、そこから交流が始まった。花園からのお礼の品や手紙などが中山道歴史資料館に展示されている。その中には、安藤広重の東海道五三次もあった。

● 明治維新は中津川から始まった！？

中津川には、桂小五郎(長州藩士)や毛利敬親(長州藩主)、井上馨(長州藩士)などが来た。五街道と宿場を取り締まっていたのが、江戸幕府の道中奉行。本陣は、裏金をつくらないように、人の出入りなどを記録する義務があった。江戸時代の旅は、旅籠(はたご)に1泊しかしてはならなかった。2泊以上すると、代官所に突き出されてしまう。

ところが、中津川では、そんな時代に麻疹がはやったことを理由に長州藩士を何泊かさせた記録が残っている。本陣で、公武合体から攘夷を実行する旨が話され、「中津川会談」が設定される。後に、大政奉還へとつながっていく。

なぜ、中津川がその場となったのか。間秀矩の手紙に、江戸で長州藩士と知り合いになったと書かれており、その理由が忍ばれる。

● 中津川に広がった平田国学

時代が大きく動く中、中津川の多くの人びとが平田門に入門。島崎藤村の父・正樹、間秀矩、市岡殷政なども入門していた。「中津川会議」の影響を受け、「攘夷」をかけた、国事に奔走した。

間、市岡の周辺にはほかにも多くの知識人達があり、定期的に行われていた和歌、俳句の会などで、知識人と平田門人らが語り合っていたとされる。このような点から見ても、ほかの宿とは明らかに違っていた。

尾張徳川家・給人の山村氏(木曾方)から献金せよとの命があったときも、「百姓はあんたのもんじゃない」と反発。「我々は、御門の前では同等だ」と主張したのも平田国学の影響。このとき、おとがめはなかったという。通商条約が勅許されたと聞き、市岡殷政と間秀矩両名は、公家に建白しに行く。

● まとめ

中津川の人びとは、主体的に幕末の道を切り開いていった。

中津川の「～したがりに」気質が、自分の国は自分で守る→植民地になってはいけない→攘夷すべきだという考えへと向かわせていった。

こうした歴史から、未来を切り開くカギが見つかるかもしれない。



★ 初日分科会

1. 自然体験ぎふ・ポータルサイトの立ち上げとその後

講師：北川健司さん(エヌエスネット)
参加者：6名
報告者：小林謙一(森林文化アカデミー)



《 報告 》

北川氏より、2009年4月に「ポータルサイト」を立ち上げるのが目標、との意思表示がなされる。その後配布されたレジュメに沿って概要、本サイトに期待すること、経費捻出についてのアイデアが北川氏から紹介された上で、「ポータルサイトでできること」「ポータルサイトマップ」についてディスカッションしたい旨伝えられる。

● 北川氏の案より

1. 「NPO 法人体験活動ぎふ」の設立

2009年1月NPO法人設立申請(設立準備総会)、6月設立総会

2. 会員像

宿泊業者、観光業者、体験活動施設、体験活動団体・指導者、バス会社

3. 会費

正会員 年会費1万円、一般会員 年会費 2,000円、登録会員 年会費無料

● 参加者の意見

○ 自然活動で一番心配なのは活動中の事故などの「リスク」だ。自然活動を行っている団体が協会をつくり共済などの共同の保険システムが欲しい。

→ CONE にも保険システムがあり、参加団体なら入れる。ポータルサイトを使って加盟などの仕組みもできるのではないか。

○ ポータルサイトの立ち上げとメンテナンスは？

→ 自然活動をしている団体は無料でリンク。サイトを充実させるために事務局から積極的にリンクをする。

・基本的に各会員は各団体の紹介ページを1ページもつ。カテゴリやキーワードで団体を検索できる。

・有料会員制度もつくる。有料会員はサイト更新や情報発信を自分たちで行える。

・参加意識の向上とサイトの更新感をねらい、会員(有料会員)が更新した情報順にどんどんトップに表示されていくシステムはどうか。

○ 県に持ちかけ、立ち上げに際し助成金の申請もあるのでは？

→ あり。現在も県ではなく文部科学省から100万円がCONE経由で助成されている。

○ ポータルサイトはイベントなどをオーガナイズしてくれるか

→ ポータルサイトのターゲットはファミリーおよび学校。オーガナイズは難しい、と考えている。

「おすすめコース」などは基本的には観光局の範疇という意識だ。

・地域コーディネーターを登録し、そのコーディネーターがプランニングしてゆくの考えられる。

・ポータルサイトの機能として、エリアや人物(インストラクター)で探せる仕組みも必要か。

● 「子ども農山漁村交流プロジェクト」から期待されること。

大きな潮流として、平成20年から総務省、農林水産省、文部科学省の三省連携で進められている「子ども農山漁村交流プロジェクト」に関して、北川氏より意見が出された。

・地域コーディネーターなど、新たな雇用創出の可能性となる。

- ・自然活動を学校教育と連携できる。その際は「体験活動」ではだめで、理科や家庭科など教科のカリキュラムにリンクした内容としての「読み替え」が必要。
- ・このプロジェクトでは自然ガイドの大量需要など、新たなマーケットができる可能性がある。現在活動している人たちだけでは足りず、林業家などから転身などのニーズも生まれるのではないか。
- ・大量の子供達を受け入れる体制をつくる必要がある。これは地域のネットワークづくりにつながる。ポータルサイトがその手助けとなるのではないだろうか。

● ポータルサイトへの参加者(団体)の品質

ポータルサイトの立ち上げに際し、北川氏よりどんな団体でも基本的には掲載するという方針が説明された。しかし掲載する登録・参加団体の品質に問題がある場合を心配した意見が出される。以下北川氏の解答及び意見。

○ 参加について

- ・すでにある団体 HP にはリンク・・・「敵」はいないと考える。団体同士でお互い知らないことで「敵」とみていることが多い。お互いが知ることによって「敵」が「敵」でなくなる。
- ・全ての団体に門戸を開く・・・疎外感の無いページづくりが必要。サイトには多くの情報が掲載されていることが大切。広く情報を集め、掲載する。

○ 粗悪な団体の排除について～対策案

- ・「リスクマネジメント講座」を開き、それに参加しているか否かをサイトに記載するという案もある。
- ・「認定制度」を、という案もあると思うが、必ずしも成功するとは言えない。北海道で「品質保証制度」が以前立ち上がったが、初期は助成金で運営されていたが、現在予算が無くなって事務局は解散した、という例もある。
- ・(保険加入しているか否かで判断できるのでは?という意見に対して)その前に「事故を起こさない会社」であることが重要。リスクマネジメントをまず学んでほしい。

● ポータルサイトのイメージを模索するディスカッション

(○は北川氏のコメント)

[情報]

- ・必要な情報に行き着けるようにしてほしい。
- ・多くの情報が紹介されていること。既存のサイトはまだ窓口が狭い。

[PR]

- ・一般客向け、観光客を呼び込みたい。
- ・参加者(お客)が「自然で遊ぶこと」自体を知らないなので、遊びの紹介を行いたい。
- ・自分を自分でPRするには抵抗がある。取材をしてくれると嬉しい。

○ 主なターゲットとして、ゲームばかりして外に出ない子供や、週末を都会で過ごす企業人などに自然体験をしてもらいたい。愛知など近くの都市住民に「岐阜に行こうか、発見しようか」と思わせる仕掛けづくり。

○ 観光局などにバナーリンクを貼る。

○ 文部科学省は指導要綱では単に「体験活動」と表記している。現在の「自然体験活動」からこの「体験活動」に内容をアレンジして対応するとターゲットが広がる。

[人]

- ・ポータルサイトを通して、岐阜県の自然体験活動のレベルを上げたい。
- ・他団体との人的交流が生まれるかもしれない。

○ 現在各地で行われている情報を一方的に伝える「役場的な地元解説」は、参加者にとって面白くない。ポータルサイトを通してと役場と自然活動を行っている民間がつながることで、「伝える技術」が向上するのではないか。

○ ポータルサイトに情報が集まっていることで、参加団体同士の最新活動情報（他社の動向）も知ることができる。

[不安]

- ・（携帯サイトの併設について）携帯サイトを併設すると、携帯からアクセスしたお客様に即反応しなくてはならない。活動中などレスポンスが遅れてしまうことがある。
- 様々な機能を盛り込むと、立ち上げに莫大な労力がかかる。サイトに必要な機能を見極め、段階的に導入することが必要。
- サイト参加団体とサイトに訪れたユーザーが、双方向につながる機能が必要。

● まとめ

- ・様々な意見が出たのは良かった。引き続き、今後も意見が欲しい。
- ・ポータルサイトをつくることで、岐阜県全体で自然活動の品質を上げたい。
- ・何をやった方がよいか、参加者に指導できるところになる。
- ・参加者の役に立つサイトを構築する。このポータルサイトを見れば必要な情報が得られるというものにする。
- ・指導者が興味を持ち、参加したくなるものをつくる。
- ・外部からのアクセスチャンスがあがるようなものとする。

2. ネットワーク・人づくり、自然学校にできること

ゲスト：萩原喜之さん（中部リサイクル運動市民の会）

担当者：千葉篤志（郡上田舎の学校事務局）

参加者：14名（うちスタッフ6名）

報告者：唐澤晋平（名古屋コミュニケーションアート専門学校）

《 報告 》

■ 萩原さんの話

<中部リサイクルについて>

1980年、27歳の時に「もうやりたくないことはやらない！」と決めて3年勤めた会社を辞めた。そのころラジオで大阪や東京でのリサイクル運動のことを聞いてこれを中部でもやろうと思った。はじめは実質「持ち出し」だったが、3年目くらいで食っていけるようになった。今は8割が事業収入になっている。組織ミッションは「地域循環型市民社会」。この「市民」には「志民」という意味もこめている。志のある人は市民だけでなく企業、行政にもいるはず。

<ネットワーク>

ネットワークとは手段でしかない。何かを成し遂げるためのツールとしてネットワークが必要になるのであって目的がなくてはならない。つなげるものとしては人、もの、時間、地域、セクターなどいろいろなものがあるが、結局つなげるのはそれぞれの中で動く人である。

市民団体と一般市民の間にもつながりが必要になる。たくさんの人を巻き込もうと思ったら動機が生まれるような働きかけが必要になる。例えば名古屋の学生はオシャレコという運動をしていて、おしゃれなところからECOにつなげていこうとしている。自然学校は多くの人に動機を起し、さらに行動につなげられるような仕組みをつくるという役割を担うだろう。

■ グループディスカッション

- ・NPO、企業、行政、学生、退職者などさまざまな人が自然体験に関わるが、それぞれの人がそれぞれの出来ることを自覚して進めていくことが重要。
- ・環境の取り組みを継続的にしていくためには環境教育を安売りせず、マーケットを作り上げていくことが必要。
- ・市民団体は組織があいまい。魅力的な団体を作っていくべき。
- ・自然学校の役割は人々に興味を持ってもらい行動に結び付けてゆくことにある。
- ・アメリカのやり方を真似するのではなく、日本的自然観に基づいた方法を考えていく必要があるだろう。

■ 感想

- ・人それぞれものの見方は違うが、説得ではなくお互いに理解しあうことが大切。
- ・一次産業が軽んじられる経済構造に立ち向かわなくてはならない。
- ・自分がやりたいことで食べていっている人がいるのがわかった。
- ・同じ価値観を持っている人に勇気付けられた。
- ・自然学校でなくても、もっと早い段階(身近なところ)で昔の暮らしや遊び・自然のことを体験できる場を考えたい。
- ・自分の中で、もう少ししっかりとした芯が必要だと感じた。その上で、いろいろなネットワークを築いていきたい。

■ 最後に(萩原さんより)

若い人は体の中に眠っているパワーを出す方法を忘れてしまっている。自分にうそをつかないこと。やりたいかどうかは理屈ではないので考えすぎると動けなくなる。人を好きになる感覚で仕事をえらんでほしい。みんなが今日の話し合いを持ち帰って岐阜で頑張ってくれたらと思う。

3. バードコールメダル

講師:栗谷本征二さん(栗くり工房代表)
参加者:13名
報告者:福井志津麻(森林文化アカデミー)



《 報告 》

まずは栗くり工房で作られた楽器の紹介から始まりました。笛、けんまた、バードコール、アジアの楽器、トロンボーン…廃材や木の実で作られたユニークな楽器がつぎつぎと紹介されました。

栗谷本さん曰く…

<クラフトの利点>

木は手に入りやすい、木は自然にかえる、ナイフ・ノギリ・サウンドペーパーがあれば誰でも作れる、見方・作り方を換えれば何でも作れる、地域とのコミュニケーションが深まる などなど

<クラフトで大切なこと>

楽器などにさわって体験していくことでアイデアが発展していく、コツコツと手作りで作っていくこと、発想の転換 などなど

<クラフトをやっていて初めて気づいたこと>

四季の1年のサイクル、そこ時期の旬が分かるようになった などなど

<事業として見たときに気をつけたいこと>

クラフトを事業として行っていきたいと考える人も多いので、自分の作品を安く売ったり、押し売

りをしたりと、後の続く人をつぶすような行為はしないこと、営業力をつけること、などが大切。

<「どうしたらアイデアが生まれると思いますか？」>

栗谷本さんから発せられた問いかけに、参加者から「たくさん物を見る」「好奇心をもつ」「じっとせずに行動する」「試作品を作る」などの意見が出されました。栗谷本さん曰く、「このような気持ちも大事だけれど、アイデアを出すにはある程度のプレッシャーが大事なのだ…」なるほど。

<バードコールづくりにチャレンジ！>

バードコール作りでは、デザインを大切にしました。最後はみんなで作品を相互に見る機会があり、「どれ1つとして同じものがない」「これ細かいねえ」「このデザインと同じものを作ろうとしてもきつとできないよ」などの意見がでてきて、とても良いアイデア・意見の交換会になりました。

<「とにかくやってみることが大切」>

残った時間で楽器演奏体験を再度しました。栗谷本さんの言った「とにかくやってみることが大切」との言葉がとても印象に残ったせいか、初めよりも積極的に楽器に触れる人が多く、教室中に笛の音が鳴っていました。さらに質問も積極的に行われる、とてもよい分科会でした。

4. プロに負けないポスター作り

講師：田村明さん(朝日大学教授)

担当：川尻秀樹(森林インストラクター岐阜)

参加者：11人

報告者：渡邊達也(森林文化アカデミー)



《 報告 》

1、デジタルカメラの使い方

はじめにデジカメを使って良い写真が撮れる方法を3つ

教えてもらいました。1つめは、良い写真を撮る最大の秘訣、「シャッターを押すこと！」です。デジカメはシャッターを押しても懐を痛めることがないので、とにかくまずは「シャッターを押す！」

2つめは、「文章は足し算、写真は引き算」。つまり、狙ったものにできるだけ近づいて撮ることです。「余計なものは画面から排除する」を心がけて写真を撮るのがコツ。そして「1枚だけで満足しない」。いろいろな角度からたくさん写真を撮りましょう。

3つめは、「ズームレンズに頼らない」。ズームを遠くのもの大きく撮るための機能だけと考えず、広角と望遠では撮影するものの形がかわってくるということです。

次にだめな写真についても教えてもらいました。それは「手振れ写真」。今まで「ピンボケ」だと思っていた写真もだいたい手振れが原因だということです。「ちょっと暗い写真」も困り者ではありませんが、これは修復することが可能なので別にだめな写真ではありません。

2、Photoshop の使い方

デジカメで撮った写真を実際に、Photoshop を使って編集するという作業をしました。用意された画像を使って画像の色味の調整、画質調整、キズや汚れ、不要なものを消す、写真の合成を順番にやってみました。

マグネットツールを使って画像から必要な部分だけを取り出したり、消しゴムやバンソウコウを使ってキズや不要なものを消したり、レイヤーを使って画像の順番を変えたり、複数の画像を合わせてありえない合成写真を作ったり、画像を切り離して別々で色を調整したりとかなり細かいところまで編集していきました。

そして、最後にポスターに絶対に必要な文字の入れ方をやりました。その文字の色を変えたり、書体や大きさ、太さも変えたりしました。中には文字をラスライズ(図形化)したり、立体化させたりと高度なことまでやっている人もいました。最後に、A4サイズを貼り合わせて完成するポスターの印刷方法まで教えてもらいました。

5. 馬籠の秋の味覚を味わう・栗きんとん

講師：古井佳子さん(郷土料理家)

「山口農産物等加工組合」組合員のみなさん

担当：原令子(岐阜県ネイチャーゲーム協会)

場所：農産物加工所(2008年4月完成)

参加者：18名(うちスタッフ2名)

報告者：松浦亜希(森林文化アカデミー)



《 報告 》

● 郷土食づくり体験

最初に、「いもこね」と「栗きんとん」を作った。「いもこね」は炊いたご飯とサトイモを粗く潰し、生姜醤油で味をつけ、焼いた煎餅状のもの。「栗きんとん」はつぶした茹で栗に砂糖を加え、絞ったもの。これらの殆どの工程は、組合員の方が準備してくださり、私達は「いもこね」を煎餅状に形を整えるところからと「栗きんとん」を絞る工程を体験した。

食づくりを体験しながら、郷土料理の歴史や今昔の違いを聞いた。昔は秋の収穫に五平餅を食べたこと、芋やからすみ、干し柿など、季節と共におやつが変わったこと、戦中戦後、米の量を減らすために里芋を加え、「いもこね」を作ったが、今は喜ばれるおやつになったこと、おやつから郷土料理が減りつつあること、などを伺う。

● 試食＋懇談会

いもこね、栗きんとんに加え、山口農産物等加工組合が馬籠の農産物を使用して作った米粉パンやりんごジャム、すももジャム、漬物数種をいただきながらのおいしい懇談会。馬籠の変容、現在抱えている課題、今後の展望について話を伺う。

・昭和40年代後半のリュックを背負って歩く、旅行ブームに乗じて多くの民宿が営業を始めた。しかし現在は宿泊客が減り、最盛期と比べると宿泊施設数は1/3に減っている。

・最近では中国人や韓国人を主とする外国人観光客が増えた。しかし、その殆どは写真撮影を行うのみで、当地への経済効果は少ない。そんな中、東海北陸道が貫通したことにより、中部国際空港～高山～白川～京都～関西空港という第2の「ゴールドライン」が出来た。今後、外国人観光客が増加する可能性がある。彼らは昔の家を好むので、語り部などの工夫で観光が活性化される可能性がある。

・馬籠では若者人口が減っている。体を使う百姓仕事や、地域で住む以上こなさねばならない様々な「役」を嫌い、町に出て行くとのこと。産婦人科も隣町まで行かないと無く、若い人が住みにくい。打開策として、外部から若者を受け入れる計画が進んでいる。2年間限定で家を10棟提供し、その間に仕事をし、地域に家を建て、定住してもらいたい意向だ。若者が増えることで地域が活性化することをねらいとして、受け入れ態勢を積極的に模索している様子が、地域住民の組合員たちとの懇談会から垣間見ることが出来た。

★ 2日目分科会

1. 地球温暖化防止ネイチャーゲーム

ゲスト: 原令子さん、池戸浄二さん
(岐阜県ネイチャーゲーム協会)

担当者: 八尾哲史(森林文化アカデミー教員)

参加者: 14名

報告者: 唐澤晋平(名古屋コミュニケーションアート専門学校)
志知香澄(森林文化アカデミー)



《 報告 》

● 自己紹介&ネイチャーゲームのイメージ

自分のフルネームとネイチャーゲームへのイメージを各自が A4 の紙に書き、発表しました。出てきたイメージは…

「気付き」「きっかけ」が多く、他には「かまえてしまう」「くすぐったい…」「(ゲームの内容に)ノリ切れたり、ノリ切れなかったり…」

● ネイチャーゲームとは？

ジョセフ・コーネルによる Sharing Nature with Children がもとになっており、ネイチャーゲームという名称は日本で生まれたそうです。最近新しいゲームもいろいろ作られるようになってきたこと、日本では保育園からの実施依頼が増えていることなどが紹介されました。

また、ネイチャーゲームが大切にしている3つのキーワード(自然への気づき[Nature Awareness]／わかちあい[Sharing]／フローラーニング[Flow learning])についてのレクチャーを受けました。

● ネイチャーゲームの体験

自己紹介から出てきたイメージを踏まえて、実際にネイチャーゲーム協会の方に3つのネイチャーゲームを実施していただきました。

(1)いくつかのチームをつくる。その後、全体のリーダーが何か生き物になり、リーダーを中心に各チームをリーダーから同じくらいの位置に配置する。その後、各チーム1人ずつ、リーダーに「食べているものは？」などのヒントを聞きにいき、みんなが得てきたヒントを元に、リーダーが何の生き物になっているかを当てる。

(2)散策道を2人ペアになってゆっくり歩き、歩きながら、自分が発見した自然のことなどを、しゃべらないで相手に伝える。

(3)今日、今いる場所の状態(自然など)の感じたことを二十四節季のように漢字で表す。(10年の間に、ネイチャーゲームの中に日本の風土を取り入れたものが出てきたそうです)

● 新しいネイチャーゲームを考える

ここまでの流れを踏まえて「地球温暖化防止」をテーマとしたネイチャーゲームやプログラムを「幼児・小学校低学年」「小学校中学年」「小学校高学年～中学生」の3つの年齢ごとのグループにわけて考えました。

「幼児・小学校低学年」は小高いところで行う『生きのびろ!』というゲームを、「小学校中学年」はフードマイレージを入り口として郷土料理などを作るといったプログラムや、道具を作る・自然を好きになるといったもの、「小学校高学年～中学生」は、火あそびという切り口からエネルギー問題を考える… など、それぞれが「地球温暖化防止」に少しでも関係のあるプログラムを作り出すことができました。

2. 秋の里山でバードウォッチング！

ゲスト: 大畑孝二さん((財)日本野鳥の会 チーフレンジャー)

担当者: 山本喜美江(東濃自然観察連絡会)

報告者: 國枝周平(森林文化アカデミー)



《 報告 》

● 自己紹介

はじめに自己紹介として、自分のフルネームと「なぜ野鳥観察に参加しようと思ったのか」「どれだけ鳥のことを知っているか」といった情報を交換し合いました。

● 野鳥観察

「まずは耳を澄ましてみましょう」という言葉とともに全員が耳を澄ましその場を飛んでいる鳥の声を聞くことから観察は始まりました。耳を澄ますだけでも複数の鳥の声を聞くことができました。

次に敷地内にあるプールまで移動して観察を開始しました。ここで本日初めて野鳥であるモズの姿を確認。プールでの観察が終わると次は体育館の裏や駐車場で観察、ここでは主にハシブトカラスのつがいを見つけることができました。カラスは秋から冬にかけて集団で生活しているとのこと。

次にグラウンドの周りとその裏手にある広場での観察。やはり広いところでの観察は野鳥が見つけやすく、カワラヒワをはじめとする 10 羽近くの野鳥が見つけることができました。

最後に林内での観察。林内では一番初めに行った耳を澄まして鳥の鳴き声を聞くことを 10 分間行いました。林内は耳を澄ますことによってとても静かで鳥の声が聞こえると思ったのですが、余り声を聴くことができなかつたのは残念でした。

● 本日のまとめ

一通りのことが終わったら駐車場まで戻り、その日の感想や野鳥に関する知識を教えてもらいました。中でも、ヒヨドリは住んでいる地域によって体の一部に変化が生じていて亜種が多い、という話が印象的でした。

大畑さんの言葉「野鳥観察はどこでもできる自然観察」を聞き、都市部などでも野帳観察はできるものなので、今回の分科会参加を期に、参加者も身近な自然にも目を向けていけるのではないかと思います。

今回のバードウォッチングは「モズで始まりモズで終わるバードウォッチング」でした。

3. 自然体験と環境教育… 白川郷でもやっています

ゲスト: 西田真哉さん(トヨタ白川郷自然学校校長)

担当者: 川尻秀樹(森林インストラクター岐阜)

参加者: 12 名

報告者: 林靖子(名古屋コミュニケーションアート専門学校)



《 報告 》

■ 導入

「環境教育の学習機会と参加スタイル」を西田さんの作った逆三角形の図を使って説明してもらいました。それによると、人数が減ることで、より主体的に学ぶことができます。では、主体的に学ぶとは？

■ プログラム1: 自然観察「バナナの断面図」

一つのプログラムとしてまず、バナナの断面図を書く、というものから始まりました。4人一組の

グループをつくり、グループごとに「バナナの筋は何本か」「何角形か」など話し合い、一つにまとめ代表者がそれぞれボードに書きます。

最後に西田さんがバナナの小話と正解を話し、その後感じたこと、気付いたことを班で共有しました。ワークショップの定義は「何らかの成果物を分かち合って持って帰る事」。

■ プログラム2:クモの絵体験など

各自で「クモの絵」を描きました。普段見かけるが、案外描けないもの(栗のイガ、ウニ、松ぼっくり)。実際スケッチして、じっくり見る。観ても、描けないものもあります。これらのワークショップから、経験が増えるほど先入観で見ていること、だから自然観察では本物を伝えたいと教えていただきました。このプログラムを森に入る前にやると、あちこちを見るようになるそうです。

■ 10通りの「みる」を教えてくださいました。

このように、国語も大事な環境教育になります。

■ プログラム3 もの当てアクティビティ

「みる」の次は「みない」で、目隠しをし、何か当てました。枝、松ぼっくり、石、葉っぱなどの11種類。無言で触り、その後、グループ内で話し合いました。

■ 「ふりかえり」が大切

小学校5年生以上になると、グループでの話し合いが出来るようになります。単独学習より、総合学習のほうが学びが深くなります。この「ふりかえり」のプロセスはプログラムで一番大切なので、時間をかけることが必要とのこと。

交流したことで新たな自然の一面がみえる、前段階に時間をかけることは大事だがなかなか普段とれない、押しつせず自由なツアーもいいかもしれない、視点さえ用意すればどこでも何を使ってもやれるなどの言葉がふりかえりのプロセスから表出してきました。

仲間がいるからこそふりかえりができ、プログラムはグループで体験することに意味があります。人の気付きも自分の気付きにすることができ、「どうして？」と再び考えることで学びへつながります。体験(Do)→みてる(Look)→考えてみる(Think)→次を考えてみる(Plan)という体験の輪が大切。

■ 体験学習(とくに「ふりかえり」)のポイント

- ・ふりかえり用紙は軽くやること
- ・アクティビティごとではなくプログラムごとにふりかえること
- ・子どもにあった質問の仕方を考えること
- ・目標とした事に対してふりかえること
- ・「感想は？」という問いは「楽しかった」などで終わるのでよくない
- ・グループは大勢過ぎても困る
- ・わかちあいができるようなグループづくりをする
- ・アイスブレイクはノリ過ぎるとちゃんとふりかえりができない
- ・小ネタをたくさん用意し状況に応じて使う
- ・具体的な道具がなくてもしゃべりでOK

■ 提供する側のふりかえり

- ・場を設定
- ・話の中身には介入しない
- ・概念化(学ぶ側のPlan)は知識がいる
- ・環境教育は価値教育であり、何に価値を置くかで変わってくる

- ・一人ではなく、できるだけ多くの人と取組む
- ・お互いの価値を認めあい、需要し合うことが大事

■ 「楽」というコト

- ・らく…環境破壊、エネルギーをためる行為
- ・たのしさ…生きる事へつながる、エネルギーを発散する行為、楽しい形にする事で人は参画できる

■ 最後に…

自分が体験することで課題やふりかえりの仕方を体験者の身になり学んだ分科会になりました。視点を変えることで、新しいアイデアが出てくる、今日の活動も、視点を変える訓練になりました。

4. 木のクラフトに挑戦 一拍子木作りー

講師: 入江鐵夫さん(行灯工房代表)

参加者: 7名

報告者: 後藤裕樹(森林文化アカデミー)



《 報告 》

今回の木のクラフト体験では、火の用心の掛け声とその後についてくるカンッ、カンッという音がなんとも懐かしいあの拍子木を作成しました。

まずは、入江さんからのなぜ拍子木づくりをテーマにしたのかというお話からスタートしました。今回の開催地である馬籠は、その坂に沿うような街の造りから吹き上げ風が吹きやすく、行灯が次々に倒れ、何度も町が大火で焼けてしまったそうです、そのため拍子木を使った火事の見回りが特に重要な地域だったことにちなんで拍子木づくりにした、ということでした。あわせて、もうすっかりその音を聞くことはなくなってしまった拍子木ですが、化石燃料の時代だからこそ、木の道具をもう一度見直したいという思いもこめて、ということでした。

次に、早速入江さんのご指導の元、順を追って拍子木の作り方を教えてもらいつつ作成をしていきました。

<材料>

材はケヤキの角材を使用、紐部分は綿を使用しました。

<道具>

ハサミ、ドリル、ノコギリ、切り出し小刀、定規、鉛筆、F字クランク、紙ヤスリ、仕上げ用クルミ油

<手順>

1.木に、紐を通す部分つくる

鉛筆で印をつけてノコギリで落とす(15×40mm)。このとき、材の中央をクランプでしっかり留める。ノコギリは、斜めにキズを入れ、溝ができたらしく。ひくときに力を入れるのがコツ。

2.紐を通す穴を開ける

切り出したら、鉛筆で角と角を結び×を描き、中央部分にドリルで穴を開ける。

3.紐取り付け部分の面取り

紐取り付け部分の角を、切り出しナイフで丸く落とす。切り出しナイフは、欠けている方を下にして注意して鞘から引き出す。

4.たたき合わせる部分を削りだす

紙ヤスリ(180番)で叩く面の縦の両端を削る(中心を端より3mm程度高くする)叩く面の部分が直線だと叩きにくく、太鼓状になっていると音がダブリ、カーンというとてもいい音になる。しかし、ケヤキの材は硬くとても根気の要る作業。

5. すべての角の面取りをする。

紙ヤスリで全ての角の部分を面取りして行く、特に木口はざらざらになるのでしっかりと紙ヤスリ(180番)をかけていく。

6.クルミ油でのオイルフィニッシュ

紙ヤスリ(320番)を全体にかけ下地を整えてから、ガーゼに包んだクルミのオイルを塗る。クルミオイルは、手にべとつかず、木肌の自然な風合いが出る。

7.紐の長さを決める

綿紐を首から下げて胸のあたりにくるあたりで切る。だいたい1m50cmくらいの長さになる。

8.紐を通す

切り取った紐を穴に通し、男結びをする。男結びとは、右端を左端の下にまわして返した輪に左端を通して結ぶ結び方。江戸時代、解けにくいのでよく使われていたそうです。

<最後に>

今回つくった拍子木のサイズや厚み、各部位の長さなどは「使い易さ」より「良い音を出すため」に最も良いとされているものだそうです。これらは江戸時代より使われ続ける中で試行錯誤され編み出されていったものだと入江さんが話されました。丁寧なご指導と、作業の中で様々な拍子木についての歴史や情報をも知ることが出来、とても充実した分科会となりました。

★ 全体会

司会:中澤朋代さん(松本大学専任講師)

報告者:小林弥生

《 報告 》

● 分科会発表

エクスカッション3つと分科会計9つのそれぞれの内容と成果を、森林文化アカデミーと名古屋コミュニケーションアート専門学校の生徒がまとめ、各人1分間で発表した。



● 東濃メンバーの紹介

今回の東濃での集いの開催に当たり、東濃側で準備・実施に貢献して下さった実行委員会メンバーの紹介があった。

会場である小学校を、地元のものを使ってほしいと無料で貸してもらえたことや、おいしいお弁当をつくってくださった湯舟沢レディースのみなさんにも感謝が述べられた。

今回のテーマである「技の見本市」のとおり、自然体験、産業、教育方法、ものづくり、さまざまな“技”が集まったのではないだろうか。

● テーマディスカッション

<この人ともう少し話したい(10分)>

エクスカッションや分科会を担当した10名の方たちと、話し足りないことを話してもらおう。参加者は、好きな場所に移動し、輪になって10分間話しをした。エクスカッションや分科会の体験を受け、参加者からも、疑問のほかにも、現場での問題点や活性化の方法、旬な対象者など、それぞれで話しあった。

<活動別につっこんで話したい(20分)>

活動の種類が7つ提示された。(下記参照)

参加者はそれぞれ興味のあるテーマに参加し、20分間のグループディスカッションを通して、それぞれ課題を出し合い、キーワードにまとめ発表した。

【エコツーリズム】

- ・情報のつながり
- ・地元発信
- ・本物の体験

【学校とつながる】

- ・子ども農山漁村学校リーダーは一体どうなっているのか？
- ・どう関わるのか？(地域、運営…)
- ・本当にやるの？できるの？
- ・良いモデルが見えない
- ・文科省からの受け入れ団体
- ・地域と学校をつなげるコーディネーター(組織人)
- ・プログラムの中身
- ・授業科目につなげる内容

【子どもたちとの活動】

- ・頭を固定させない
- ・答えは体験のなかにある
- ・幼児が旬

【施設運営】

- ・指定管理者制度

【地域再生・自然を守る】

- ・子ども

【人づくり(人材育成)】

- ・自ら動く
- ・心を開く

【エコおしゃれ(エコかつこいい)】

- *参加者なし

<地域ごとに集結したい！(30分)>

各地で活動している人たちが集まった。地域ごとに「どうにかしよう」と話し合う。「こんなことをやってみよう」という、宣言を発表。

【東濃(10名)】

「設立宣言！～実行委員会」今回、初顔合わせ。東濃だけでなく、学校リーダーということで、これからもどんどんつながっていきたい。レクリエーションセンターの活用。

【西濃(3名)】

「森づくり文化を高める」森林文化アカデミーつながりで集まった。「川」はいるが、「山」がいない。一般の人たち山への関心を高めていきたい。

【中濃・岐阜(7名)】

「自然←→歴史」岐阜、可児、東白川を中心に活動。歴史でつながっている。歴史を含んだ名所が多い。

【飛騨(6名)】

「地元の人に地域の良さを発信しよう」資源はあるのに地元の人たちに理解されていない。

【奥美濃(7名)】

「今度一緒に飲みましょう(鍋)！」地域づくりが大切。地域の輪、和！

【愛知(10名)】

「もっとがんばろう！」自然は少ないが、岐阜より平野が多い。もっとがんばろうと話合った。

【信州(5名)】

「つながらないけど、つなげたい！」ダイレクトメールでこの会を知った(2名)。活動は信州でもあるが、つながっていない。面積は岐阜より大きい。年齢層も幅広い。ぜひつながっていききたい。

● まとめ

各地域、本当にやりたいことを考えて行きましょう。そして、川と山のつながりを大切に。またつながって行きましょう、と締めくられた。

★ 閉会式

司会:川尻秀樹さん(森林インストラクター岐阜)

報告者:小林弥生



《 報告 》

● 川尻さんのしめくり

- ・今回、5回目の集い。来年はどこで？
- ・もっとCONE(自然体験活動推進協議会)を知ってもらいたい。
- ・自然体験の仲間で、岐阜全体のレベルアップを計って行きましょう。

● 実行委員会からの挨拶(北川健司さん)

- ・今回で、岐阜県すべてのエリアを回った。今後は、地域ごとやテーマごとなど、さまざまな企画をしてもらって、開催していきたい。
- ・地域別のテーマディスカッションで、信州の人に「うらやましい」と言われたように、魅力あふれる岐阜。地域の人たちに、ほこりを持たせるのが役目。



スペシャルプログラム & 交流会

■ 展示説明

☆ 間伐材・バイオマスチップ使用の新商品や 新素材開発の展示・説明

田村 明さん(朝日大学)

間伐材のバイオマスチップの実物を見せての
説明。生物分解性の竹繊維による樹脂製品
の紹介もありました。



■ 飛び入りプログラム

☆ 夜の馬籠ツアー

ガイド:原 令子さん

(岐阜県ネイチャーゲーム協会)

昼の観光地の顔とはちがう夜の馬籠を地元
の人ならではの視点から案内していただき
ました。



■ 交流会



交流会マーケット

アンケート結果

<開催時期>

1最適	2適切	3ややまずい	4まずい
7	18	1	

<開催場所>

1最適	2適切	3ややまずい	4まずい
11	16		

<施設>

1最適	2適切	3ややまずい	4まずい
14	13		

<評価と感想>

■エクスカッション

	1非常に良かった	2良かった	3どちらともいえない	4悪かった
中山道	2	4	3	
けやき平		3		
林業のプロ	3	2		

■基調講演

1非常に良かった	2良かった	3どちらともいえない	4悪かった
2	8	10	4

■分科会1

	1非常に良かった	2良かった	3どちらともいえない	4悪かった
ポータルサイト	3	1		
ネットワーク		2		
バードコール	2	3		
ポスター作り	3	3		
栗きんとん	3	2		

■分科会2

	1非常に良かった	2良かった	3どちらともいえない	4悪かった
ネイチャーゲーム	5		1	
バードウォッチング	2	9		
環境教育	5			
拍子木作り	2			

■交流会

1非常に良かった	2良かった	3どちらともいえない	4悪かった
10	14	1	

<開催時期>

- ・ 連休中でイベントや行事が多かったかも。
- ・ 他の行事と重なりやすい時期だった。それではいつ？といわれてもだけど。
- ・ もう少し早い時期でもいい。あえて毎年時期を変えてもいい。

<評価と感想>

■エクスカージョン

◇中仙道:ガイド方法がよくなかった。

参加者がとても多く、ガイドの話を聞き逃した。一般観光客が多かった。

◇林業のプロ:実際の林で仕事をしている人野の生の声はよかった。

■基調講演

- ・ もっと聞きたい。
- ・ 少し難しかったかも(人名など)?
- ・ もっと時間がほしい。
- ・ 街道の話でなかった。
- ・ 留橋(?)のいわれがわかってよかった。
- ・ 内容に乏しい。
- ・ 手元に資料がないことと、予備知識がないと理解できないところがあった。
- ・ 歴史が得意でないのか?
- ・ 難しすぎて分からなかった。
- ・ 興味がある人にはgoodだったのでは。

■ 分科会1

◇ポータルサイト:具体的導きがよかった。

◇ポスター作り:もっと時間がほしい。(2)

◇栗きんとん:地域のおばちゃん和交流できた。

地元の人と交流できた。

地元の話がよかった。

お母さんと話ができうれしかった。里芋もちすぐに作ってみたい。

◇バードコール:毎月実施している講座のヒントをもらった。

単に作るだけでなく、どうみせるか、営業するかなど、ためになった。

■ 分科会2

◇バードウォッチング:丁寧な解説で分かりやすかった。

寒かったので、準備不足で残念。

◇環境教育:かなり参考になった。

すぐ使えそうと再認識

◇ネイチャーゲーム:新しいゲームを考案する考え方が得られた。

たくさん時間がほしかった。

よいヒントがもらえた。

時間が足らなかった。

新ネタをもらった。

◇拍子木作り:単純だが奥深い。

■交流会

- ・ 他団体の人と話ができて面白かった。
- ・ 若い人と交流できた。
- ・ お酒が豊富でよかった。
- ・ 楽しかった。

<全体の評価と感想>

- ・ とても有意義な2日間になった。関係者の方に感謝します。
- ・ 堅苦しくなくてよかった。
- ・ 地元(中津川出身)の情報・活動をしている人たちと出会えてよかった。
- ・ 今回はバランス(時間割、メニュー)がとれていて大変よかった。
- ・ 全体にうまくまとまったように思う。いろいろ細かい点で不備があったが。
- ・ とても充実した2日間だった。分科会も全体買いも食事も最高だった。
- ・ 盛りだくさんすぎるかな？
- ・ 勉強になった。
- ・ 他団体の人と話ができて、面白かった。
- ・ 最初不安だったが、打ち解けてよかった。
- ・ 目的を達成した。
- ・ 1日しか参加できず、もっと皆さんと交流したかった。
- ・ 毎度思うが、時間の手際が良い。インフォメーションがしっかりしている。
- ・ 楽しく参加させてもらえた。
- ・ 今回も大勢と交流ができ、つながりが広がりとてもよかった。
- ・ ユルキャラな流れがうれしい。
- ・ いつも楽しく参加させていただいている。スタッフの皆さん本当にお疲れ様でした。
- ・ 毎回楽しみに来ている。地元、岐阜という事で顔なじみのメンバーでとても良い交流の場だ。

<次回への要望>

- ・ バードウォッチングは次もやってほしい。
- ・ 引き続きよい講師を呼びたい。
- ・ 岐阜地区での開催はいかがか。
- ・ 必ず出席する。
- ・ 1泊の講習会は初めてだったので、皆さん知り合いばかりでどうしようかと思ったが、皆きさくに話しかけてくれたので楽しく話げできた。
- ・ 来年は全日程来たいと思う。
- ・ 人文・地学系も分科会があればいい。
- ・ 事務局の存在が分かりづらい。今後、分かりやすいように期待。

総括に変えて

紅葉の季節に歴史ある馬籠の地に、岐阜県や周辺の県から参加を得て5回目の集いを無事終了することができました。多くの方が集まり交流するこの集いもこれで岐阜県下をすべて回ることができました。

現在、自然体験活動というキーワードは、幼児から熟年まですべての世代、すべての地域に広がりを見せ、いろいろなところで自然体験活動の取り組まれて盛んにおこなわれています。体験活動を通じての学びや癒しなどその効果が認められてきています。

川と山のぎふ自然体験の集い実行委員会では、岐阜県下で体験活動の取り組みをしている団体や個人を交流する機会として年に一回集いの催しを開いていますが、今年度はさらに「自然体験活動指導者講座」を岐阜県内で12か所行っています。

体験活動に取り組む人が知り合い交流し、協働につながってきています。フィールドで知り合った方と出会い機会も多くあります。「こんにちは」「ひさしぶり」「元気！」そんな言葉を交わしあえる仲間が増えて来ていることにとても喜びを感じます。しかし、まだまだ知りあえる人はいっぱいいるはず。もっとつながり、もっと知り合い、もっといい活動をするためにさらなる取り組みを進めたいと考えます。

集いに参加していただいた方に感謝、今回参加できなかった方も次回またお会いしましょう。

川と山のぎふ自然体験の集い実行委員会
代表 北川健司

第 5 回川と山のぎふ自然体験の集い報告書

発行 2009年3月16日

山と川のぎふ自然体験活動の集い実行委員会
事務局

岐阜県岐阜市月丘町 5-13
特定非営利活動法人 エヌエスネット 内
TEL 058-249-1166

編集責任者 高屋 良平